

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：37126

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K20794

研究課題名（和文）統合失調症者の就労へのステップアップを目指したビデオ教材開発

研究課題名（英文）Development of teaching materials aimed at improving work for patients with schizophrenia

研究代表者

柴田 裕子（SHIBATA, Yuko）

福岡女学院看護大学・看護学部・助教

研究者番号：20437924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究における成果は、統合失調症患者の就労に向けたモチベーションの向上を目的とした教材を開発したことである。開発した教材は、今年度ウェブサイトより公開予定である。開発にあたって、就労移行支援施設の利用者、施設職員にインタビューを行い働こうと思ったきっかけや施設を利用して感じたメリット、施設を利用することで得られる支援について把握し内容に反映させた。またデイケアを利用している統合失調症患者に教材の視聴を依頼した。視聴時に視線計測を行い注視点を把握した。また、感想を聞き教材に修正を加えた。その結果、理解しやすく自身の体験と照らして共感できる内容であったという評価が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害者雇用が推進される中で働くことへの動機付けとなることを目的とし教材を作成した。本研究の成果は、就労を目指す統合失調症患者の声を反映させた教材（動画）を作成したことである。また、教材（動画）視聴時の統合失調症患者の眼球運動の特徴を踏まえ制作した。眼球運動は教材（動画）の修正前後で注視時間の割合が変化したシーンとしなかったシーンがあった。注視点が中央部分に集中し探索運動がみられず限定的であるという点で先行研究と相違はなかった。しかし、視覚情報だけでなく聴覚による情報をストーリーとして提供する内容であったため視聴した対象者からは分かりやすい内容であったとの評価が得られた。

研究成果の概要（英文）：The result of this research has been the development of a video aimed at improving motivation to work in patients with schizophrenia. The developed video will be released on the website this year. During the development, through interviews with users of the work transition support facility as well as staff of the facility, the motivation for working, the merits felt by using the facility, and the support obtained by using the facility were understood, and are reflected in the content of the video. We also interviewed patients with schizophrenia who attend daycare center to view the video. While viewing the video, the line of sight was measured and the focus point was investigated. Also, the patients' impressions were asked and subsequent corrections made to the video. As a result, this research concludes that the contents of the video were easy to understand the patients felt it reflected their own experience.

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症 就労 教材開発

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

障害者雇用促進法により民間企業において、従来の法定雇用率が 1.8%から 2.0%に引き上げられた(平成 25 年 4 月 1 日)。しかし、法定雇用率達成企業は、未だ半数以下(42.7%)にとどまっている現状にある。特に精神障害者の雇用状況は知的・身体障害者に比して最も低く、就労に対する自信のなさにより就労に踏み出すことができない現状がある。その理由として「就労そのものへのイメージや意欲が少ないこと」(星野,2009)が挙げられる。また、就労に対する動機付けに関しては支援量が少ない(森谷,2012)ことが明らかにされており、就労に向けたきっかけ作りが必要である。

2. 研究の目的

本研究では特に精神障害者の就労へのステップアップを目指した教材の開発を目的とした。

3. 研究の方法

1) 第 1 段階

就労系障害福祉サービスを利用する当時者、施設職員へのインタビュー調査を行う。

2) 第 2 段階

教材の試作

3) 第 3 段階

教材を用いて視線解析、インタビューを行う。その結果を用いて教材内容の修正を行う。

4) 第 4 段階

修正した教材を用いて再度視線解析、インタビューを行う。

4. 研究成果

1) 統合失調症患者の就労継続支援施設を利用するきっかけとメリットについて

教材の内容を精選する第一段階として、就職することの困難について明らかにするために 3 か所の精神科デイケアに研究協力の打診をした。しかし、利用者の高齢化や就労の困難さを語ることへの抵抗感から研究協力を得ることができなかった。そのため、実際に一般就労を目指している就労移行支援施設の利用者(統合失調症と診断されている 5 名)にインタビュー調査を実施し、施設の利用に至った経緯やメリットについてインタビューを行った。

その結果、利用者の施設利用のきっかけとして「就職やパソコンを習いたいと思っていた時に新聞広告やインターネットで障害者の就労支援をしている施設の存在を知った」「障害者の就職実績が高いことや訓練の内容への期待があった」「社会に出ていない期間があるため訓練して少しずつ慣れていきたいと思った」「見学や体験入所で施設の環境や職員、利用者の雰囲気が気に入った」「働いて親から自立したいという思いがあった」「就労継続支援施設では主体的に就職に向けた活動をするのが難しく将来に不安を感じた」「主治医の働くうえでのアドバイスや親からの勧めによる後押しがあった」が挙げられた。

また、利用することのメリットとして「ゆっくり様々な職種について調べたり実習体験を通して検討できる」「職員の関わりに助けられる」「他者との交流が広がる」「自他ともに成長したとを感じる」「生活リズムが整うことで日中に活動できるようになった」「パソコンの段階的な練習や資格取得に向けて学習できる」「心身の負担にならないよう対処する練習ができる」「働くうえでの基本事項や障害者の就職活動や無理のない働き方について学べる」「自分の知識や経験を活かした作業ができて楽しさを感じる」ことが明らかになった。

2) 統合失調症患者の就労継続視線施設を利用するきっかけとメリットについて

就労継続支援施設における利用者 3 名における利用のきっかけは「仕事をしてお金を稼ぎたい」「身近に就労継続支援施設を利用している人がいた」「入院したことをきっかけに真面目に働こうと思った」「デイケア等の施設職員からの紹介」であった。メリットとして「働くことの楽しさの実感」「他者から必要とされる嬉しさ」等が挙げられた。

3) 教材の内容について

Atkinson(1978)は、モチベーションの大きさを数式で示している。動機(M)は、達成動機の強さを示しており、成功願望が失敗恐怖を上回る際に出現する。動機(M)と目標が達成された場合の課題の価値(I)に課題の困難度(E)を掛けたものがモチベーションの大きさになる。この理論を背景として架空の主人公を登場させたアニメーションを制作し、就労移行支援施設を利用するうえで①どのような思いやきっかけがあったのか、②どのような期待があったのか、③何が利用の後押しとなったのか、④就労移行支援施設を利用してよかったと感じる内容をストーリーとして示す。このことにより、同じ疾患を抱えた利用者がどのような経緯で利用に至ったか、何がメリットであるのかを知ることによって教材(動画)の視聴者に「自分にもできるのではないか」という動機付けにつながる教材になると考えた。

4) 教材(動画)視聴時の被験者の視線測定とインタビュー結果

制作した教材(動画)は全 21 シーンで構成され視聴時間は 5 分 33 秒であった。研究協力が得られた精神科デイケアの利用者 5 名に視聴を依頼した。視線測定には、ナックイメーজテクノロジー

一社の EMR-dStream2 を用いた。視線測定の結果、画面中央に人物を置いた 1 シーンでは、特に両目、口を注視していた。人物の両目の総注視時間割合は 45.4%、口に対する総注視時間割合は 36.9%であった。背景に彩色を施していたが、ほとんど注視していなかった。

また、図 1 の主人公が統合失調症の発症に伴い周囲から疎外感を感じているシーンでは、人物以外の平均注視時間が 37.6%であり、次にほぼ中央に位置している左側の男性の身体付近に平均注視時間割合 22.1%で停留時間が長かったことがわかった。画面右側の人物に対する注視時間割合は 0%であった。先行研究(中山, 2002)において明らかにされている統合失調症患者の眼球運動の特性として、長い停留時間や狭い視野、少ない運動であるといった特徴を裏付ける結果であった。



図 1 対象物が左右にある際の被験者の視線の停留点(5 名分)

対象者へのインタビューより教材(動画)の内容において抽象的な表現に対する意味を読み取りづらさがあることがわかった。教材(動画)の修正点として画面上複数の対象物が提示された際に注視していなかったため、対象物をより少なくした。また、背景の色は殆ど注視していなかったため、背景色を抜いた。さらに、主人公の表情をより明確に伝わるよう修正した。また、聴覚から得られる情報量(ナレーション)を増やした。

5) 教材(動画)修正後の視線測定とインタビュー結果

修正した教材(動画)は 23 シーンで構成され視聴時間を 7 分とした。初回到視聴した対象者に再度研究協力を依頼した。その結果、5 名中 3 名の研究協力が得られた。同様のシーンで 3 名の被験者の視線の停留点を図 2 に示す。同一の対象者の停留点の時間割合を修正前後で比較した(Mann-Whitney 検定)。その結果、修正前より修正後の方が主人公(中央より左側)の身体の注視時間割合が増加していた。ゲイズプロットでは縦軸方向に移動する視線の動きが増加していた。しかし、修正前後で有意差のないシーンもあった。

インタビューでは、自分の体験を振り返りながら視聴することができ、見やすくなったという意見が得られた。

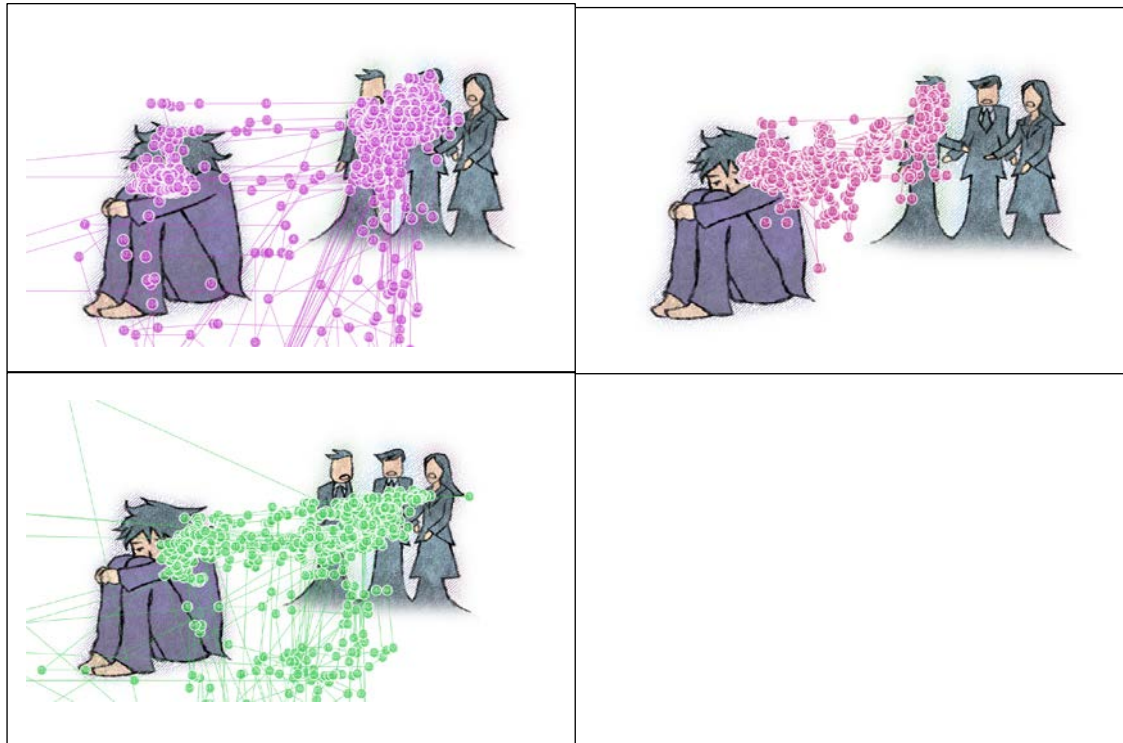


図 2 対象物が左右にある際の被験者の視線の停留点(3 名分)

6)教材の活用

今回作成した教材(動画)だけでは就労に向けてどのような支援が行われるのか詳細を知ることが難しい。就労に向けてどのような支援があるのか全容が分かるコンテンツと併せて Web 上で公開することや精神科デイケアで就労支援をする際に教材の 1 つとして提供することができる。今後、就労への動機付けの方法の 1 つとして活用を広げていく必要がある。

(引用文献)

Atkinson, J. W., & Litwin, G. H. Achievement motive and test anxiety conceived as motive to approach success and motive to avoid failure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1960, 60, 52-63.

星野藍子, 鈴木國文(2009). 就労体験プログラムにおける統合失調症患者の障害特徴と支援. *作業療法* 28(6), 646-656.

中山広宣, 森田喜一郎. (他). (2003). 社会生活における統合失調症者の視覚認知機能 電車利用のビデオを用いて(第 4 報). *作業療法* 22 巻, 298.

森谷就慶(2012). 国際機能分類を用いた精神障害者の就労支援に関する考察. *精神保健福祉* 43(3), 199.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1 . 発表者名 柴田裕子
2 . 発表標題 統合失調症者の就労移行支援施設利用の動機付けとなる教材開発について
3 . 学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
4 . 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山崎 不二子 (YAMASAKI Fujiko)		
研究協力者	岩崎 優子 (IWASAKI Yuko)		